

俳句時評 語り部の志

角谷 昌子

語り部がいないと作者は忘れ去られて

しまう——俳句総合誌「俳句研究」の編集長だった故高柳重信はそう考えていた。その高柳は同誌で一九六九（昭和四十四）年、急逝した俳人・渡邊白泉の追悼特集を組み、業績を顕彰した。

戦争が廊下の奥に立つてゐた

作者名は知らなくても、白泉のこの句を記憶している人は多いだろう。大戦中、白泉は治安維持法違反の嫌疑で検挙され、執筆禁止を命じられた。そのため

戦後、俳壇から長い間忘れられた。

白泉没後、五十二年を経て今泉康弘著『渡邊白泉の句と真実』（大風呂敷出版局）、川名大著『渡邊白泉の一〇〇句を読む』（飯塚書店）が出版された。白泉は生前、「自分の俳句は五十年たてば評価される」と妻に語ったそうなので、二冊の出版に不思議な符合を感じる。

白壁の穴より薔薇の国を覗く
街燈は夜霧にぬれるためにある
鶏たちにカンナは見えぬかもしれぬ

われは恋ひきみは晩霞を告げわたる

日向ぼこするや地球の一隅に

おらは此のしつぽのとれた蜥蜴づら

どの句も決して色褪せない。〈廊下の

奥〉のほか〈銃後といふ不思議な町を丘

で見た〉〈繻帯を巻かれ巨大な兵とな

る〉〈夏の海水兵ひとり紛失す〉などの

印象が強いが、反戦俳人とは一概に呼べ

ない、より多彩な作風である。

今泉は白泉に密着し、川名は俳句史か

ら俯瞰的に捉える。両者とも作品と境涯

を詳しく解説し、白泉の遺族や関係者の

証言を得て文献だけに頼らない。語り部

としての志がある。（俳人・評論家）